

平成 23 年度 第 1 回 JSL 研修

国際教育センター 平成23年度第1回 JSL 研修

【日本語学級初任者研修—まず知っておきたいこと—】

平成 23 年 3 月 11 日の東北地方太平洋沖地震で被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。1 日も早く、学校に子どもたちの元気な声が戻ってきますように。

東京学芸大学国際教育センターでは、日本語を母語としない児童生徒(JSL 児童生徒)の教育に関わる方々を対象とした研修会を以下の日程で開催します。

- 第 1 回「日本語学級初任者研修—まず知っておきたいこと—」
2011 年 5 月 14 日(土)開催
- 第 2 回「みんなで考えよう—JSL カリキュラムの理念を生かした授業作り—」
2011 年 6 月 25 日(土)開催
- 第 3 回「みんなで共有しよう—よりよい授業実践にむけて—」
2011 年 10 月 22 日(土)開催

第 1 回は今年度初めて JSL 児童生徒教育に携わることになった教員を対象に、「今」必要な知識と情報の提供を目的としています。第 2 回は一歩進めて「JSL カリキュラム」を考え方を学び、それを生かした授業作りを行います。さらに 3 回目には、それぞれの実践を持ち寄り、相互に検討することで指導力の向上を図ります。

第1回の研修では、JSL 児童生徒に初めて関わる教員を主たる対象とし、JSL 児童生徒教育の基礎となる情報、理論を学んでいただきます。また、日本語学級担当者としての先輩教員から、「日本語初期指導」「教科指導」「日本語学級経営」について体験を聞きます。その上で、上記3つのグループに分かれ、経験豊かな講師を交えたディスカッションを通して、参加者が抱える課題への対応の方法を探っていきます。(第 1 回研修では、「JSL カリキュラム」を直接扱うことはいたしません)

日本語学級担当の先生方から「最初は何をどうしたらよいか、見当も付かなかった」というお話をよく聞きます。少しでもそうした先生方のお力になればと考え、研修を企画いたしました。第 1 回の研修会プログラムを同封いたします。お忙しい時期とは存じますが、ぜひ、ふるってご参加ください。

【第 1 回研修のご案内】

■日時:平成23年5月14日(土)10:00~17:00

終了いたしました。ご来場の皆様ありがとうございました。

* JSL カリキュラム活用支援サイト[「こどものにほんご」](#)で、第 1 回研修の情報がご覧頂けます。

■会場:東京学芸大学南講義棟(S棟)4階(小金井市貫井北町4-1-1)[>>アクセス](#)

* 会場は国際教育センター(合同棟 1 階大教室)ではございませんのでご注意ください。大学内の地図に関しては上記リンク先の東京学芸大学 Web サイトでご確認下さい。

■参加費:無料

■プログラム

全体進行:見世千賀子(東京学芸大学国際教育センター)

10:00 開会挨拶 金谷 憲(東京学芸大学国際教育センター長)

- 10:10 趣旨説明 菅原雅枝(東京学芸大学国際教育センター)
- 10:15 講義1 全体講義「外国人児童生徒教育の課題」(仮)
吉谷武志(東京学芸大学国際教育センター)
- 11:30 講義2 全体講義「学齢期の子どもの第二言語習得」(仮)
松井智子(東京学芸大学国際教育センター)
- 13:00 実践紹介
13:00～13:30 初期日本語指導 中島聡子(墨田区立 柳島小学校)
13:30～14:00 教科指導 寺沢奈由(渋谷区立 神南小学校)
14:00～14:30 学級経営 竹内節子(浜松市立 開成中学校)
(14:30～14:45 休憩)
- 14:45 分科会
【コーディネーター】
今澤 悌(甲府市立 新田小学校)
小川郁子(北区立 稲付中学校)
近田由紀子(浜松市立 瑞穂小学校)
濱村久美(新宿区立 大久保小学校)
- 16:45 全体会
17:00 閉会

第32回 海外子女教育セミナー

「海外子女教育の充実に向けて—実践の現状とこれからの課題—」

海外という教育の場、そこで学ぶ子どもたちの実情は刻々と変化しています。これらの状況を受けて、在外教育施設での日々の実践は何をめざし、どのような特徴を発信していくことができるのでしょうか。今年度のセミナーでは、海外子女教育にみられる実践、授業づくりの現状に焦点を当て、その充実への課題を模索していきたいと思えます。午前中は、まず、文部科学省初等中等教育局国際教育課専門官の北崎哲章氏より、海外子女教育に関する国内外の状況と施策、派遣教育の役割についてお話をいただきます。次に国際教育センターの稲田素子特任准教授から、当センターに寄せられた実践報告をもとに、海外子女教育の実践の現状と課題について、お話をさせていただきます。午後は、日本人学校への派遣希望者と補習授業校の派遣希望者に分かれて、分科会を行います。海外での教育実践について参加者で考えたり、赴任後の海外での生活全般に関する質問などを受付けます。在外教育施設に派遣を希望する教員の方、海外子女教育に関心をお持ちの方、この機会にふるってご参加ください。

■日時:平成23年5月28日(土) 10:00～16:45

終了いたしました。ご来場の皆様ありがとうございました。

■会場:東京学芸大学合同棟1階大教室

■対象: 在外教育施設派遣教員登録者、これから在外教育施設に派遣を希望する教員、及び海外子女教育に関心をお持ちの方

■主催: 東京学芸大学国際教育センター

■プログラム

総合司会: 榎原 知美(東京学芸大学国際教育センター講師)

9:30 開場、受付開始

10:00～10:10 開会のあいさつ 金谷 憲(東京学芸大学国際教育センター長)

日程説明

10:10～11:00 講演「在外教育施設における派遣教員の役割」(仮題)

北崎 哲章(文部科学省初等中等教育局国際教育課海外子女教育専門官)

11:05～11:50 講義「海外子女教育にみる授業づくりの現状と課題

—在外教育施設の実践報告をもとに—

稲田 素子(東京学芸大学国際教育センター特任准教授)

11:50～13:00 昼食

13:00～15:00 帰国教員による在外教育施設における実践報告

今井茂樹(前天津日本人学校教諭、東京学芸大学附属小金井小学校教諭)

小澤 茜(前ニューデリー日本人学校教諭、栃木県下都賀郡壬生町立壬生中学校教諭)

小林達俊(前台北日本人学校教頭、東久留米市立大門中学校副校長)

国嶋 信(前ブラッセル補習授業校教頭、川崎市立南百合ヶ丘小学校教頭)

15:00～15:15 休憩

15:15～16:45 分科会 (日本人学校と補習授業校の2グループに分かれて)

(1)日本人学校分科会

[ファシリテータ]

吉谷 武志(東京学芸大学国際教育センター教授)

見世千賀子(東京学芸大学国際教育センター准教授)

[助言者]

滝 多賀雄(全国海外子女教育国際理解教育研究協議会会長)

(2)補習授業校分科会

[ファシリテータ]

佐藤 郡衛(東京学芸大学国際教育センター教授・副学長)

稲田 素子(東京学芸大学国際教育センター特任准教授)

[助言者] 横山 富夫(前ストックホルム補習授業校校長)

16:45 閉会

平成23年度 第2回 JSL 研修

国際教育センター 平成23年度第2回 JSL 研修

【みんなで考えようーJSL カリキュラムの理念を生かした授業作りー】

5月の第1回研修会に続き、以下の日程で、日本語を母語としない児童生徒(JSL 児童生徒)の教育に関わる方々を対象とした研修会を開催します。今回は、「JSL カリキュラム」の考え方を学びます。また少人数のグループでディスカッションをしながら「JSL カリキュラムの考え方」を基にした指導の展開や、それぞれの場面での支援の方法を具体的に考えていきます。皆様のご参加をお待ちしております。

※分科会の班編制のため、お手数ですが、第1回研修会にご参加くださった方ももう一度お申し込みください。

【第2回研修のご案内】

■日時:平成23年6月25日(土)10:00~17:00

終了いたしました。ご来場の皆様ありがとうございました。

*JSLカリキュラム活用支援サイト「[こどものほんご](#)」で、分科会報告がご覧頂けます。

■場所:東京学芸大学(小金井キャンパス)

■定員:60名

■費用:無料

■プログラム

全体進行:榊原 知美(東京学芸大学国際教育センター)

10:00 開会挨拶 金谷 憲(東京学芸大学国際教育センター長)

10:00~10:05 趣旨説明 菅原雅枝(東京学芸大学国際教育センター)

10:15~12:00 講義「JSLカリキュラムの考え方」佐藤 郡衛(東京学芸大学国際教育センター)

12:00~13:00 昼食

13:00~15:45 分科会 授業づくり

【講師】

赤羽 寿夫(東京学芸大学附属国際中等教育学校)

今澤 悌(甲府市立 新田小学校)

近田 由紀子(浜松市立 瑞穂小学校)

寺沢 奈由(渋谷区立神南小学校)

傍士 輝彦(東京学芸大学附属世田谷中学校)

谷 啓子(練馬区教育委員会日本語指導員)

和田 玉己(福岡市教育委員会日本語指導員)

15:45~16:00 休憩

16:00~17:00 全体会

17:00 閉会

第12回 外国人児童生徒教育フォーラム

外国人児童生徒の「こころのケア」を考える –メンタルヘルスの支援体制づくりを目指して–

近年学校現場での子どもこころのケアの重要性が指摘され、さまざまな取り組みがなされるようになってきました。しかし、外国人児童生徒の心の問題はその背景の多様性もあってあまり取り上げられてきませんでした。今回の外国人児童生徒教育フォーラムでは、学校保健、カウンセリングなど異なる立場で子どもたちに関わっていらっしゃる先生方をお招きし、お話をうかがいます。また、フロアの皆様の体験なども伺いながら、これまでと異なることば、文化、社会の中で生活する子どもたちの心を、我々周りの大人たちがどのように支えていけるのかを考えてみたいと思います。

子どもたちからのSOSを受け止め、対処して行くには何が必要か、ご一緒に考えましょう！

■ 日時：2011年10月1日(土)10:00～16:45

■ 場所：[中野サンプラザ](#)

(〒164-8512 東京都中野区中野 4-1-1 TEL 03-3388-1151)

最寄駅 JR 中央・総武線／東京メトロ東西線「中野」駅 北口より徒歩 1 分

■プログラム

10:00 開会

10:00～10:05 開会挨拶

10:05～10:15 趣旨説明

10:15～10:55 【報告1】朝倉 隆司(東京学芸大学教育学部養護教育講座教授)

「学校保健からみた外国人児童生徒のメンタルヘルスをめぐる問題」

* 朝倉先生は「学校保健」がご専門で、多くの養護教諭を育て、現場に送り出してこられました。また日系ブラジル人生徒が日本の学校で感じるストレスについてのご研究もあり「マイノリティーが健康に暮らせる社会づくり」を目指して活動されています。

10:55～11:35 【報告2】伊藤 美奈子(慶應義塾大学教職課程センター教授)

「日本における不登校の現状とスクールカウンセラーから見た支援の実際」

* 伊藤先生は高校教員の時、担任した学級に不登校の生徒がいたことから心理学の道へ進まれ、不登校の問題を中心に研究されています。スクールカウンセラーとして、直接子どもたちとも接していらっしゃいます。

～伊藤先生から～

外国人の子どもたちとの関わりは多くないですが、主に、日本の学校における不適應(主に不登校)の実態と、スクールカウンセラーからみた支援の実際についてお話しできればと思います。

11:35～12:15 【報告3】阿部 裕(明治学院大学・四谷ゆいクリニック)

「医療現場からみた外国人児童生徒のこころの支援」

* 阿部先生は在住外国人、特に日系ラテンアメリカ人や難民のこころの支援ネットワークづくりに向けての基礎的な調査研究やこころの実践的支援活動に取り組まれています。また院長を務める四谷ゆいクリニックでは「多文化外来」を設置、先生ご自身もスペイン語でカウンセリングをなさっています。

12:15～13:30 昼食

13:30～14:00 【発題に対するコメント】箕口 雅博(立教大学現代心理学部教授)

* 箕口先生は生活の場で起こる心理的／社会的問題の解決を目指す「コミュニティ心理学」がご専門です。留学生会館の相談室カウンセラーや、中国帰国者定着促進センターの精神保健コンサルタントも務めていらっしゃいます。

14:00～16:45 【パネルディスカッション及び全体討議】(途中休憩 15 分)

朝倉 隆司(東京学芸大学)
伊藤 美奈子(慶應義塾大学)
阿部 裕(明治学院大学・四谷ゆいクリニック)
箕口 雅博(立教大学)

パネリスト:佐藤 公孝(川崎市総合教育センターカリキュラムセンター課長)

* 佐藤先生は昨年度まで帰国・外国人児童生徒教育の担当指導主事をされていました。子どもや保護者との面接、支援者の派遣、学校との連絡係と「日本語指導が必要な子ども」を取り巻く大人たちの結節点の役割を果たしてこられました。

16:45 閉会

平成23年度 第3回 JSL 研修

平成23年度第3回 JSL 研修会
みんなで共有しようーよりよい実践に向けてー

東京学芸大学国際教育センターでは今年度2回のJSL研修を実施いたしました。その中で繰り返し言及されていたのが、日本国内にいるJSL児童生徒の多様さと、子どもたちの実態に合わせて授業を組み立てる重要性です。JSL児童生徒教育で大切なのは、知識を基に実際に授業を作り実践してみること、そしてそれを振り返ってみることだと考えております。

そこで、第3回JSL研修会は、参加者が持ち寄った実践、指導案、教材をもとに、講師を交えてディスカッションをする形の研修を企画しました。お互いの実践から良いところ、取り入れられるところを見つけ、さらによりよい実践を目指しましょう。皆様のご参加、お待ちしております。

【第3回研修のご案内】

- 日時:平成23年10月22日(土)10:00~17:00
- 場所:東京学芸大学(小金井キャンパス)N講義棟
- 費用:無料
- 内容:参加者による報告、ディスカッション、講師からのアドバイス

公開研究会

公開研究会「日英バイリンガル児童と学校教育 —これまでの成果と今後の課題」

日本は現在でも基本的に単一言語(モノリンガル)の社会を構成している。モノリンガル社会におけるバイリンガル学校教育には、バイリンガル社会におけるバイリンガル教育とは異なる困難が多々あることは誰もが認めるところである。またそのことは、多くのモノリンガル国家が公教育において本格的な小学校での第二言語教育に懸念を示す理由でもある。しかしながら現実には日本の公教育は多言語児童を多く抱え、方向転換を余儀なくされている。

日本にいる多言語児童、すなわち外国人児童、国際結婚児童、海外子女・帰国子女は、モノリンガル社会の中のある種の小宇宙とも言えるバイリンガル環境の中で生活経験を積む。国内でバイリンガル教育

を提供する学校(多くが私立)もまたひとつの小宇宙としてバイリンガル環境を作り、子どもたちの言語および様々な知識や能力、社会性を育む使命を果たしつつある。バイリンガル教育の現場ではひとつひとつ課題を克服するための努力を積み重ね、成果に結びつけている。このようなバイリンガル教育の現場での実績と課題を、多言語児童を抱える日本の公教育の発展に生かすことができるだろうか。またもしできるとしたら、どのような方法があるのだろうか。これらの点を議論することが本研究会の目的である。

国内のインターナショナルスクールの現状と課題について New International School 校長の Parr 氏にまずご報告をお願いする。次に国外の公教育におけるバイリンガル教育の例として、日英バイリンガル教育を行っているアメリカ唯一の公立小学校の校長である Friebus-Flaman 氏にお話いただく。最後に帰国子女教育の成果と課題について啓明学園国際センター長の横内氏にご報告いただく。共通の論点として①各校の生徒の特徴(入学条件)、②カリキュラム上の特徴、③評価の方法、④将来の進路の特徴、⑤バイリンガル教育が成果を挙げられる条件、⑥日英とも伸びない子どもへの対応、⑦日本人の児童の言語発達に特徴的な課題、⑧家族の背景などをお話いただく予定である。

■日時:2011年11月26日(土) 13:00~17:00 開場:12:30

■場所:共立女子大学 3 号館 508 教室(東京都千代田区神田神保町 3-27 3 号館)

[アクセス](#)

■対象者:二言語習得、海外帰国子女教育、英語教育、インターナショナルスクールに関心をお持ちの研究者、学校関係者、学生、一般の方

■主催:東京学芸大学国際教育センター共同研究

「多言語・多文化環境で育つ児童の学習言語の発達と障害」

東京学芸大学国際教育センター

「海外子女教育の新展開に関する研究プロジェクト」

■共催:共立女子大学

金沢大学子どもまごころの発達研究センター

プログラム [英日通訳付き]

13:00-13:05 挨拶 松井智子(東京学芸大学教授)

13:10-13:20 趣旨説明 権藤桂子(共立女子大学教授)

13:20-14:10 話題提供1 Steven Parr (New International School 校長)

14:10-14:20 休憩

14:20-15:10 話題提供2 Marion Friebus-Flaman (Dooly Elementary School 校長)

15:10-15:40 話題提供3 横内繁樹(啓明学園国際教育センター長)

15:40-15:50 休憩

15:50-16:05 指定討論 稲田素子(東京学芸大学特任准教授)

16:05-16:50 ディスカッション 進行:松井智子

17:00 閉会 権藤桂子

国際シンポジウム

国際シンポジウム 多言語環境児童の学習言語の発達と障害

—イマージョン教育から見てくること—

グローバル化の進行に伴い、我が国でも多言語環境で育つ児童が増えています。本シンポジウムでは、多言語環境で育つ児童の学習言語の発達と障害について、イマージョン教育の第一線の研究者、教育者による講演を企画しています。また、多言語環境で育つ発達障害児も増加傾向にあり、支援や研究の必要性が高まっています。これらの児童の言語発達と障害についても意見交換ができる機会にしたいと思います。多くの方のご参加をお待ちしています。

日時:2011年11月27日(日)午後1時~午後6時

■場所:共立女子大学3号館508教室(東京都千代田区神田神保町3-27-3号館)

アクセス

■主催:金沢大学子どもの心の発達センター

■共催:東京学芸大学国際教育センター

RISTEX プロジェクト「自閉症にやさしい社会:共生と治療の調和の模索」

多言語発達支援研究会

共立女子大学発達相談・支援センター

■企画:権藤桂子(共立女子大学)

松井智子(東京学芸大学)

大井学(金沢大学)

プログラム [手話通訳つき]

13:00-13:10 挨拶 大井学氏(金沢大学教授)

13:10-14:40 講演1 中島和子氏(トロント大学名誉教授)

14:40-15:40 講演2 古石篤子氏(慶応大学教授)

15:40-16:00 休憩

16:00-17:30 講演3 Friebus-Flaman, Marion 氏 (Principal, Dooley Elementary School)

17:30-17:50 質疑応答

17:50-18:00 挨拶 大井学氏

シンポジウム講演要旨

■講演1 「マイノリティー言語児童生徒とイマージョン教育」

中島和子氏(トロント大学名誉教授。カナダ日本語教育振興会名誉会長、母語・継承語・バイリンガル教育研究会会長)

1960年代にカナダで始まったイマージョン教育は、教科学習の50%以上を第2/3言語で行う学校環境である。加算的バイリンガル育成の有効な手段として40年以上の実績があり、現在世界各地で使われている言語教育の1形態である。国内の外国人児童生徒のようなマイノリティー児童生徒にとってもイマージョン教育が学習言語を伸ばす学習環境となるのであろうか。学校で教科学習をL2(日本語)で行うため、日本語に'immerse'したイマージョン的状况ではあるが、L1(母語)を使用した教科学習がないため、

母語が後退、喪失の危険に晒され、母語の学習言語が育たない。このために日本語の学習言語の獲得も遅れがちで、結果として減算的バイリンガル(母語は捨てて現地語のモノリンガルになる)ケースが多い。マイノリティー児童生徒の母語の学習言語を育てるあり方として、カナダ(中部3州)の継承語イマージョン、米国の双方向イマージョン(Two-way immersion)、海外児童生徒教育のための週末イマージョン(補習授業校)の例を取り上げる。

■講演2「ろう児のバイリンガル教育—カナダ Drury 校の試みを通して」

古石篤子氏(慶応大学教授)

ろう児が知覚上の不全感なく獲得し使用できる言語は手話であり、日本ではそれは日本手話、英語圏カナダでは ASL(アメリカ手話)である。これらの手話は言語学的に見て音声日本語・音声英語とは異なる独自の文法をもった自然言語のひとつとされる。したがって、日本手話や ASL を使用するろう者はその居住地において言語的少数者である。このような子どもたちの教育環境の構築をカナダ・オンタリオ州立 Drury 校の実践を通して考えたい。わが国のろう教育では未だ聴覚口話法が主流であり、手話の言語環境は不十分であるが、Drury 校ではバイリンガル教育を行っている。これは第一言語としての ASL と第二言語としての書記英語の2言語の習得を目指すものである。しかしながら、視覚と聴覚という異なるモードの2言語獲得は容易なことではない。発表では Drury 校での実践を、ビデオを見ながらご紹介したい。特に幼稚部や小学部での発達に応じた2言語教育、ASL-phabet(grapheme)を通じての言語意識の育成、MVL(Manipulative Visual Language)使用の英語教育などについて触れようと思う。

■講演3 "Educating Bilingual Students with Special Needs in a Japanese-English Dual Language Program "

Marion Friebus-Flaman, Ph.D. (Thomas Dooley Elementary School)

Dooley Elementary School is a K-6 public school that houses a Japanese-English two-way immersion program. This program is designed to develop students who are bilingual, bi-literate and bicultural, with approximately half of the students entering Kindergarten as native speakers of English and half of the students entering Kindergarten as native speakers of Japanese. From Kindergarten through 6th grade, half of the curriculum is delivered in Japanese and half in English. Over 200 students participate in this program. Of these students, there are a handful of students who have been diagnosed with cognitive disabilities or ASD/PDD. The presenter will give an overview of the two-way immersion program; then focus specifically on the instructional strategies and supports employed in educating Japanese-English bilingual students who have these special needs. The roles and responsibilities of classroom teachers, instructional assistants, special education resource teachers, and other related services staff will be presented as well as parents' roles and communication between home and school. Video clips of instruction and samples of student work will also be presented.

第3回 多文化共生フォーラム

「多文化共生社会における市民性教育カリキュラムを考える—高校を中心に—」

多文化共生フォーラムは、多文化化が急速に進行する日本の学校の現状に対し、「多文化共生」という課題を正面に据えて、教育における対応や今後のあり方について議論することを目的としています。今回は、「多文化共生社会における市民性教育カリキュラムを考える」をテーマに、特に、高等学校段階に焦点をあて、多文化共生社会において求められる市民的資質とは何か、かつそれを学校教育でどのように育成するのか、そのためにはどのようなカリキュラムの開発を行う必要があるのか、検討していきたいと思います。外国につながる生徒を含め、多様な背景をもつ生徒に対し、提供すべきリアルな市民性教育カリキュラムとはどのようなものなのか、ご参加の皆さまと一緒に考えていきたいと思っています。

■主催:東京学芸大学 国際教育センター

■日時:2012年2月18日(土)13:00~17:00

■場所:東京学芸大学(小金井キャンパス)S棟303教室 [>>アクセス](#)

プログラム

12:30 受付開始

13:00 - 13:10 開会の辞 金谷 憲(東京学芸大学国際教育センター長)

13:10 - 13:20 趣旨説明 見世 千賀子(東京学芸大学国際教育センター准教授)

13:20 - 13:50 『『現代社会』の授業における多文化共生教育の試み』

山根 俊彦(神奈川県立横浜清陵総合高等学校教諭)

13:50 - 14:20 「都立小山台高校定時制課程1年生『市民科』のカリキュラムの提案」

角田 仁(東京都立小山台高等学校主任教諭)

14:30 - 14:45 「高等学校における多文化共生教育の可能性—2つの提案をうけて—」

吉谷 武志(東京学芸大学国際教育センター教授)

14:45 - 15:00 休憩

15:00 - 16:45 パネルディスカッション

「多文化共生社会における市民性教育カリキュラムのあり方をめぐって」

【コーディネーター】佐藤 郡衛(東京学芸大学理事・副学長)

【指定討論者】杉田 かおり(筑波大学人間系特任研究員)

「イギリスのシティズンシップ教育をふまえて」

【パネリスト】

山根 俊彦(神奈川県立横浜清陵総合高等学校)

角田 仁(東京都立小山台高等学校)

吉谷 武志(東京学芸大学国際教育センター)

16:45 - 17:00 まとめと閉会

*プログラムの内容は変更となることがあります。

第5回 国際教育センターフォーラム

「グローバル時代における子どもの文化間移動と教育 —内外の補習教育を通して—」

東京学芸大学国際教育センターでは、第5回「国際教育センターフォーラム」を2012年3月3日(土)に下記の要領で開催いたします。

海外にある補習授業校(児童生徒は週日は現地校、国際学校に就学)の教育は、従来、日本から海外に出て、また帰国するという構造のもとで考えられてきましたが、近年では、現地に滞在する子どもの滞在の長期化、国際結婚家庭や永住家庭の子どもの増加、低年齢化など多様化が進行しており、これらの現状に対応した教育のあり方が模索されています。

このような滞在地に生活する子どもたちの教育を考える上で、日本国内にある外国の補習教育施設の実践は手がかりを与えてくれるものと思われまます。今回の報告では、海外にある補習授業校を通して海外で教育を受ける日本人の子どもたちと家族の態様について考えます。あわせて日本にある外国の補習教育に注目し、文化間を移動する子どもの補習教育、また日本の海外子女教育の新たな方向性についての示唆を得たいと思います。

本フォーラムは、国際教育センターの共同研究プロジェクト「グローバル時代の海外子女教育の新展開に関する研究」の中間報告でもあります。今後の研究の方向性や課題について、ご来場の皆様と様々な角度から意見交換ができればと考えています。子どもの文化間移動と教育、海外子女教育、帰国児童生徒教育、外国人児童生徒教育などに、関心をお持ちの教員、研究者、学生、一般の方はぜひご参加ください。

■主催:東京学芸大学 国際教育センター

■日時:2012年3月3日(土)13:20~16:50(受付 13:00~)

■会場:[中野サンプラザ](#) 8階 研修室2

(〒164-8512 東京都中野区中野 4-1-1 TEL 03-3388-1151

最寄駅 JR中央線・総武線/東京メトロ東西線「中野」駅 北口より徒歩1分)

【プログラム】

総合司会:松井智子(東京学芸大学国際教育センター)

13:20 開会 金谷 憲(東京学芸大学国際教育センター長)

13:25~13:35 趣旨説明 佐藤郡衛(東京学芸大学理事・副学長)

13:35~15:05 研究報告

【報告1】シンガポール日本人保護者の学校選択と補習授業校の位置づけ

岩崎未来(お茶の水女子大学グローバル教育センター)

【報告2】スイス国際結婚家庭における補習授業校の意義

渋谷真樹(奈良教育大学)

【報告3】滞日ブラジル人生徒の進路と補習教育

拝野寿美子(神田外語大学)

15:05~15:15 休憩

15:15~16:50 ディスカッション

【コメンテーター】稲田素子(東京学芸大学国際教育センター)

【パネリスト】岩崎未来、渋谷真樹、拝野寿美子

【まとめ】佐藤郡衛

16:50 閉会

国際シンポジウム

国際シンポジウム

「社会的能力はどのように発達するのか：心の理論・言語・文化の獲得」

自他の行動の背後にある信念や意図を推測する能力は「心の理論」や「メンタライジング」と呼ばれ、その系統的進化および個体的発達に関して過去 30 年間に多くの研究がなされています。本シンポジウムでは、心の理論の発達が母語や母文化の獲得とどのように関連するのか、そしてそれがより多面的な社会的能力および対人コミュニケーション能力として発達していくのかについて理解を深めることを目指します。また、環境的・生得的要因により、これらの能力の獲得が困難な子供に対して、教育・療育的観点からどのような対応ができるのかについても検討していく機会としたいと思います。心の理論と言語あるいは文化の関係についての最新の研究成果を、国内外の研究者が報告いたします。加えて発達心理学、言語学、霊長類学といった多分野の研究者が討論をリードします。子供の心の発達、社会認知、言語発達などに関心のある方にぜひご参加いただきたいと思います。

■日時:2012年3月18日(日)9:45~18:00(開場 9:15)

■場所:東京学芸大学西講義棟(W棟)301教室

[アクセス](#)

■参加費:無料

■資料代:1000円 ※大学院生500円

(休憩時のお茶・コーヒー代も含まれます。当日受付にてお支払いください)

■主催:東京学芸大学国際教育センター

■協賛:科学研究費新学術領域「予測と意思決定」

プログラム

9:45 開会

10:00 - 11:00 "The generality of metarepresentational development:
Theory of mind, language and culture"

Martin Doherty, University of Stirling, U.K.

11:00 - 12:00 "Culture and theory of mind:
Japanese and Canadian children's beliefs about child and adult knowledge"

Stanka Fitneva, Queen's University, Canada

12:00 - 13:00 昼食

13:00 - 13:40 「子どもの他者理解と言語文化」 松井智子(東京学芸大学)

13:40 - 14:20 「日本の子どもにおける誤信念理解の発達:感情理解との関連から」
内藤美加(上越教育大学)

14:20 - 15:00 「聴覚障害児における心の理論の発達」 藤野 博(東京学芸大学)

15:00 - 15:20 休憩

15:20 - 15:50 指定討論1 今井むつみ(慶応大学)

15:50 - 16:20 指定討論2 堀江 薫(名古屋大学)

16:20 - 16:50 指定討論3 橋彌和秀(九州大学)

16:50 - 17:00 休憩

17:00 - 17:50 全体ディスカッション

18:00 閉会

18:30 - 20:30 意見交換会(参加費4000円 ※大学院生は2000円)

※使用言語は英語と日本語になります(フロアからの質問やディスカッションは日本語で結構です)

※当日は生協がお休みで、近隣にレストランなどありませんので、昼食などは各自でお持ちくださることをお勧めいたします。なお正門から3分ほどのところにセブンイレブンがあります。

発表要旨

■"The generality of metarepresentational development: theory of mind, language and culture"
Martin Doherty, University of Stirling

Children pass traditional theory of mind tasks around the age of four years. This is claimed to show explicit understanding of mental representation. I will report comparable research on non-mental metarepresentation. For example, metalinguistic awareness is the ability to reflect on language. Producing an alternative name for an object poses similar demands to the False Belief task: given one word for a referent (e.g., rabbit), children must produce another (e.g., bunny, or animal). The ability to do this is specifically related to success on the false belief task, and remains so when age, verbal mental age, and performance on tests of executive function are taken into account.

Similar associations have been found with tests of understanding of homonymy, in which children have to select the two distinct referents of a given word (e.g., bat: sports equipment or flying mammal). Furthermore, the pictorial analogue of homonymy is the phenomenon of ambiguous figures, pictures which have two distinct interpretations, such as the well-known duck-rabbit. Children become able to acknowledge both interpretations at the same time they pass tests of homonymy, alternative naming and false belief understanding. Interestingly, children with autism are relatively good at ambiguous figure tasks, while remaining poor at other forms of metarepresentation.

These findings suggest that children develop a general metarepresentational capacity at around four years. I will also present data that suggests that cultural differences in mental metarepresentation are paralleled by cultural differences in non-mental representational understanding.

I will finish with a theoretical account of what develops at four, using the hypothesised mutual exclusivity bias of word learning as a test case: metarepresentational understanding of language is required to overcome this constraint, and the ability to do so is related to theory of mind development.

■"Culture and theory of mind: Japanese and Canadian children's beliefs about child and adult knowledge"
Stanka Fitneva, Queen's University

Developing understanding of people is a universal developmental task but do all children accomplish it the same way? Focusing on the development of beliefs about child and adult knowledge, we examined this question by comparing Canadian and Japanese children. In both countries, all children were able to identify adult-specific knowledge and only older children displayed beliefs about child-specific knowledge. However, Japanese children relied much more than Canadian children on their own knowledge in deciding what children know. Furthermore, only their beliefs were related to those of parents. These differences are consistent with the independent/interdependent distinction between Canada and Japan and suggest that cultures may take children on different paths of development of beliefs about the mind.

■「子どもの他者理解と言語文化」

松井智子 東京学芸大学

これまで心の理論に関する発達研究は、他者や自己の行動の背後にある信念や感情を子どもがいつどのように理解するのかを検証してきた。研究成果として、世界のどこに生まれても、どの言語を話していても、4歳から5歳の間に子どもは一次表象レベルで信念が理解できるようになることが明らかになった。しかしその一方で、他者理解能力が必要不可欠である対人コミュニケーションの場で、子どもが他者の心的状態をいつどのように理解するのかに関しては十分な研究がなされてこなかった。英語圏では例外的に心的状態を表す語彙の獲得に関する研究が進められ、たとえば want, like など欲求に関する語彙は2歳で、think, know などの心的動詞や確信度を表すモダリティ表現 may, must は4歳から5歳の間に獲得されることがわかっているが、それ以外の言語を母語とする子どもの発達調査は未だに希有である。そこで本報告では、日本人幼児が会話の中でどのような言語情報を手がかりに他者情報の信頼性を判断しているのかについて検討したい。まず会話において使用頻度が高いモダリティ表現や、文末イントネーションによって示唆される話し手の確信度の理解について検証する。日本人幼児は3歳までに話し手の確信度を表す手がかりとして文末助詞「よ」「かな」と上昇・下降のイントネーションを理解できるのに対して、ドイツ人幼児が文末イントネーションやモダリティ表現などを通して話し手の確信度を理解するのは5歳以降であることを報告する。さらにこのような言語情報を手がかりとした他者理解を、総合的な他者信頼性判断能力の一部としてとらえ、発達的な特徴を検討したい。日本人幼児は3歳までに文末助詞「よ」が話し手の強い確信度を表すことを理解できるものの、3歳児が「よ」を使う人は誰でも信じる傾向があるのに対して、5歳児は相手の立場や過去の正確さなどふまえて総合的に相手の信頼性判断ができることを検証する。

■「日本の子どもにおける誤信念理解の発達：感情理解との関連から」

内藤美加 上越教育大学

心の理論研究はこれまでもっぱら1次の誤信念理解を取り扱い、4歳頃とされる誤信念課題の通過を境に、子どもの心的理解が飛躍的に変化すると主張してきた。それはこの研究領域が、心の理解の発達には4歳以降ほとんどみべき変化を想定していないことの現れである。さらに心の理論研究は、子どもの心的理解を信念つまり表象についての認知的な理解と同義に扱い、例えば感情や情動の理解はその研究対象から除外してきた。しかし社会的能力は当然ながら1次誤信念理解が最終到達点ではなく、その達成後も社会文化的な環境に適合するような形でより熟達していくと考えられる。さらに社会的能力は誤

信念(表象)の認知的理解にとどまらず、日本語で"気持ち"と表現されるような情緒や感情状態を含んだより広範な理解を包含する。

本報告では、日本の子どもの1次誤信念理解が欧米の報告とは異なる発達を示すことを概観し、次いでそれより複雑な推論を要する2次誤信念課題すなわち再帰的な表象理解と感情領域での心的理解との関連を検討する。感情理解は、相手からみた自分の感情を操作するという点で再帰的思考が関わると想定できる感情表出ルールを取り上げた。4~8歳児を調べた結果、日本の子どもは欧米人が6歳で理解する2次誤信念を8歳で漸く理解したが、それを再帰的に説明することはなかった。感情表出ルールの理解も同様に8歳でほぼ達成された。しかしその理由づけは、主に対人圧力に基づくものから、表情を隠す動機についての再帰的視点の言及へと徐々に変化していった。さらに年齢や言語能力を統制すると、2次誤信念理解と表出ルールの理解は4~6歳では相関せず、8歳でのみ強い相関を示した。すなわち、認知領域と感情領域の心の理解が児童中期に初めて統合するということである。これらの結果を、広範な社会的認知あるいは心の理解の言語的かつ社会文化的な構成という点から論じる。

■「聴覚障害児における心の理論の発達」

東京学芸大学 藤野 博

聴覚障害児における心の理論(TOM)の発達と、それに関係する言語的・非言語的変数について検討した。聴覚障害のある幼稚園年中から小学6年生までの幼児・児童計508名を対象としてサリーとアン課題(一次誤信念課題)をアニメーション形式(動画・音声・文字提示)で個別に実施した。対象児の良耳の平均聴力は100.8 dB(SD=13.0)であった。

課題の通過率は、年中が20%、年長が23%、小1が31%、小2が38%、小3が59%、小4が63%、小5が58%、小6が73%であった。また、生活年齢、平均聴力、PVT-R 語彙年齢、失語症構文検査(STA)理解・産生、標準抽象語理解力検査、語流暢性検査、質問応答関係検査、RCPMの各スコアを説明変数、サリーとアン課題の通過/非通過を目的変数とし、ロジスティック回帰分析(変数増加法・尤度比)を行った。

その結果、PVT 語彙年齢と STA 産生がサリーとアン課題の通過を有意に予測できる変数として選択された。語彙理解および統語産生の発達年齢と課題通過の関係を見ると、語彙年齢は3歳レベルで12%、4歳が36%、5歳が30%、6歳が66%、7歳が67%、8歳が61%、9歳が82%、10歳が69%、11歳が83%、12歳が93%であった。STA 産生は3~4歳レベルで26%、4~5歳が40%、5~6歳が50%、6歳が57%、7歳が68%であった。

Schick et al.(2007)は聴覚障害児において標準的な一次誤信念課題の成績を予測できる変数として語彙理解と補文処理の力を抽出しているが、本研究の結果はこの知見を基本的に支持するものと考えられた。また、一次誤信念課題に50%以上が通過できる語彙理解力と統語産生力の発達年齢は6歳以上であると推察され、聴覚障害児はASD児の場合と同様、TOMの獲得に定型発達児よりも高い言語力を必要とすることが示唆された。